

2016年11月20日川越教会

幼 な 子 へ の 祝 福

加藤 享

【聖書】 マルコによる福音書 10章 13～16節

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

【序】 心も体も健やかに

去る11月15日は**七五三のお祝い**の日でした。男の子が三才・五才、女の子が三才・七才になると、親子で盛装して氏神にお参りします。昔は医療が貧しく、幼い子が病気で次々と死にました。そこで、「ああ三才になった、有難い」「もう五才、七才に達した。これで無事に成長してくれるだろう」と喜び祝ったのでした。**幼児の健やかな成長**は、家族の何よりの願いです。千歳飴の長い袋を下げて記念写真を撮ります。

でも体だけでなく、**心の健やかさ**も大切です。次のようなフランスの実話を読みました。或る画家が**天使の絵**のモデルを探していました。「あの家に行ってください。天使のような子が居ますよ」本当にそうでした。汚れを知らぬつぶらな瞳、可愛い笑顔、もみじのような手。彼は夢中になって天使の絵を仕上げました。大評判になりました。

月日が経ち画家も老いました。人生の様々な経験から悪魔の誘惑の恐ろしさを味わった彼は、**悪魔の絵**を描き遣そうと思い立ちました。刑務所に通い凶悪な囚人をモデルにしました。この絵も評判になりました。すると彼が若い時に画いた天使とどこか似ていると言う人が出てきました。調べてみると、まさしく、あの**天使のモデルの成れの果て**だったそうです。どこでどう人生が狂ってしまったのでしょうか。恐ろしい話です。

子どもの可愛らしさは、小さな弱い者を守るために神さまが与えて下さった**保護色**です。大きくなるにつれて失せていきます。保護色に代わって、年令と共に輝きを増していく**内面の美しさ**こそを、身に着けていかなければならないのではないのでしょうか。

[1] 天国とは

イエスさまは、弟子たちが子どもたちを連れて集まって来た親たちを叱って、追い払おうとしたのを見て、非常に**憤慨**しておっしゃいました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。」この**憤る**という動詞は、福音書ではこの箇所ではしか使われていません。この時のイエスさまの**怒り**が特別だったのです。弟子たちはどうして子供たちを追い払ったのでしょうか。

この時イエスさまは、**十字架の死**を目指してエルサレムの都に向かっておられました。弟子たちは8章、9章でも、イエスさまからその**予告**を聞かされていたのですが、その意味がよく分かりませんでした。しかしイエスさまからは**唯ならぬ決意**の気配が伝わってきます。「大変な事態が起ころうとしている」と弟子たちも感じとりました。ですから、イエスさまを煩わせまいとして、「**子供たちは邪魔だ**。あっちに行った、行った」と追い払ったのでしょう。私たちでもよくしてしまう行動です。

しかしイエスさまは、十字架の死を目指して居られたからこそ、大人の都合でつい邪魔者扱いをされてしまう**子供たちを大事にすること**、また**神の国に入る心構え**を弟子たちにしっかり教えておきたかったのでしょう。

「**神の国はこのような者たちのものである**。はっきり言うておく。子供のように神の国を**受け入れる人でなければ**、決してそこに入ることはできない。」子供たちが大人よりも罪汚れのない清い者だから、天国へ入れると言われているのではありません。**子供の心**にも既に**罪の根**はあるのです。子供たちの世界も、いさかいが絶えない毎日です。

ですからイエスさまは、神の国は**子供たちのもの**だとはおっしゃらずに、**このような者たちのもの**とおっしゃいました。そして言葉を続けて「子供たちのように神の国を**受け入れる人**でなければ、決して入ることはできない」と**受け入れる**という点を強調されました。

私たち大人は、神の国に入れていただくためには、それなりの良い業、良い自分を献げなければならないと誤ってしまいます。しかし幼児は何も出来ない自分を、それでも良いと抱いてくれる人の手に、そっくり**自分を委ねます**。天国に入るにはそれで良いのだ、否、そうでなければ入れないと、イエスさまは弟子たちに強くおっしゃったのでした。

そうです。能力のある者、優れた者が良い地位を占め、無力で弱い者はみじめな思いをしているのが、この世です。このような世界は天国ではありません。強かろうが弱かろうが、一人一人が**在るがままの自分**で大事にされ、皆が平等で差別されない国こそ、天国ではないでしょうか。何も出来ない者、小さくて弱い者がそのまま迎えられるこそ、天国なのです。大人はこの**天国の真理**を、幼な子から学ばなければならないのです。

イエスさまは子供たち一人一人を抱き上げて、手を置いて祝福して下さいました。イエスさまのこのお姿に、何も出来ない小さな者に対する**限りない愛**が現れています。無力な者を**無条件で受け入れて**、豊かな祝福を注ぐ愛が現れています。もしも私たち大人が、我が身をそのような神の愛の手に委ねるならば、私たちの心にも、小さな者、弱い者への**惜しみない愛**が、与えられるのでしょうか。

[2] 子どもと共に礼拝を

親は食事に気を配ります。子供の好き勝手にさせません。悪い友達と付き合って悪に染まらぬように注意します。子供の好き勝手にさせません。勉強だって同じでしょう。としますと、**真実の愛**を育てていくために、**イエスさまの愛に出来る限り触れさせることも**、とても大事ではないでしょうか。

私は札幌でもシンガポールでも、幼い子供も大人も**皆一緒に**礼拝を守ってきました。子供たちは礼拝を苦にしませんでした。両親たちには、先ず**家庭**で我が子と一緒に讃美歌を歌い、短く聖書を読み、お祈りする**礼拝経験**を日常的に持つようお願いしました。そうすると教会の礼拝の心地よさが分かって来ます。幼児が静かにできる時間は短いものです。気を紛らわす工夫が必要です。でも音の出る玩具や食べ物を与えることは、この目的にそいません。周囲の人も、幼児をあやしかけたりせず、**真剣な礼拝態度**を幼児に示します。

幼稚園以上になると、自分の聖書・讃美歌を持たせ、讃美歌を歌う時には、自分の讃美歌を開いて歌い、聖書も自分の聖書を開いて読むようにします。静かに出来る限界がきたら、室外に出てあやしたり、息抜きをさせて、礼拝堂に戻ります。たとえ少々うるさくても、**幼児が共に礼拝出来たことは**、たとえようもなく素晴らしいことであり、**教会全体の喜び**です。

やんちゃ坊主が、小学4年生になってこんな感想文を書いてくれました。

「そうがくが始まると、**僕の心はしずまります**。さんび歌が始まるときれいな声で歌いたくなります。説教は、神さま・イエスさまのすばらしさにかんどうします。聖書がおもしろくなってきました。おいのりはとても心がしずまります。」大人たちが大切に守っている礼拝を、子どもたちもちゃんと受けとめてくれているのです。

【結】 祈り

詩人**八木重吉**はこう歌っています。「さて あかんぼうは なぜに あんあん
あんあん **なくんだろう** ほんとうに**うるせいよ** あんあん あんあん あん
あん あんあん **うるさかないよ** うるさかないよ よんでいるんだよ **かみ
さまをよんでいるんだよ** みんなもよびな あんなにしつつこく よびな」

幼な子もお祈りが大好きです。神さまを心から信じてお祈りします。イエスさまは「子供をわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」とおっしゃっています。一人一人を抱き上げて、手を置いて、祝福しようと招いておられるのです。今日、私たちの礼拝で幼子に手を置いて祝福の祈りができて、嬉しい限りですね。**幼な子たち全ての上に、神さま・イエスさまの祝福が豊かに在りますように**、心から願います。

お祈りします：主なる神さま。あなたはイエスさまとなって、私たちのところに来て下さり、あなたの深い愛を現わして下さいました。特に今日は、弟子たちに追い払われた幼い子どもたちを、一人一人抱き上げて、手を置いて祝福して下さいましたイエスさまのお姿を、今一度お示しにないながら、私たち教会家族に与えられた子ども達と一緒に礼拝を守ることが出来ましたことを、心から感謝します。子どもたちが、心も体も健やかに成長していきますように、お守り下さい。その家庭を、そして私たちの川越教会を、豊かに祝福して下さい。イエス・キリストによって、お祈りします。 アーメン

子どものしつけ

秋田県男鹿半島には、「**なまはげ**」という行事があります。小正月の晩に鬼の仮面・仮装をした若者が、家々を訪れ、親の言いつけをよく守るように子供たちをおどして廻ります。恐怖に泣き叫び、母親にしがみつく幼児の姿が TV でも全国に放映されます。子どものわがままや悪事に厳しい罰を下す**鬼の恐ろしさ**を、我が子の心に刻み付けておこうと考える親心——**教育的配慮**なののでしょうか。私は自分の牧師から、「こどもの躰けに、神さまを安易に利用してはいけない」とよく言われました。

一方**イエスさま**は、自分を待ちうけている十字架の死を目指してエルサレムに向かう途中で、弟子たちが追い払った幼い子どもたちを、**一人一人抱き上げて、手を置いて祝福なさいました。**

多くの病人を癒し、苦しむ者、悲しむ者を助け慰めて来られたイエスさまが、どうして十字架上に6時間も苦しんで殺されなければならなかったのでしょうか。弟子たちですら理解できなかったのですから、子どもたちや、その親たちの理解を超えていたのは当然でしょう。

しかしイエスさまは、十字架上で「**父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです**」と語り、大祭司はじめユダヤ教指導者やローマ総督たちを含めて、すべての者の罪を我が身に引き受けて、死んでいかれました。(ルカ福音書 23 章 34 節)

その**深い愛**が、幼な子たち一人一人の頭に置かれた**イエスさまの手を通して、注がれた**ことを、後になって知らされた親子たちは、どれほどの感動を新たにしたことでしょうか。人生が一変したことでしょう。私たちは「なまはげの 恐ろしさ」ではなく「**イエスさまの愛**」を伝えていかなければなりません。

(加藤 享)